



## 新生児期

生まれた日を0として27日目までの時期

## 周産期

妊娠28週以後の胎児期と 生まれてから7日目までの期間

## 在胎週数による分類

早期産児	在胎37週未満で生まれた赤ちゃん
正期産児	在胎37週以上 42週未満で生まれた赤ちゃん
過期産児	在胎42週以上で生まれた赤

## 在胎週数と出生体重の関係による分類

small-for-dates (light-for-dates)	在胎週数に対して出生体重が軽い(子宮内胎児発育遅延)
appropriate-for-dates	在胎週数にあった出生体重(出生体重基準値の10~90パーセントイル)
large-for-dates (heavy-for-dates)	在胎週数に対して出生体重が重い場合

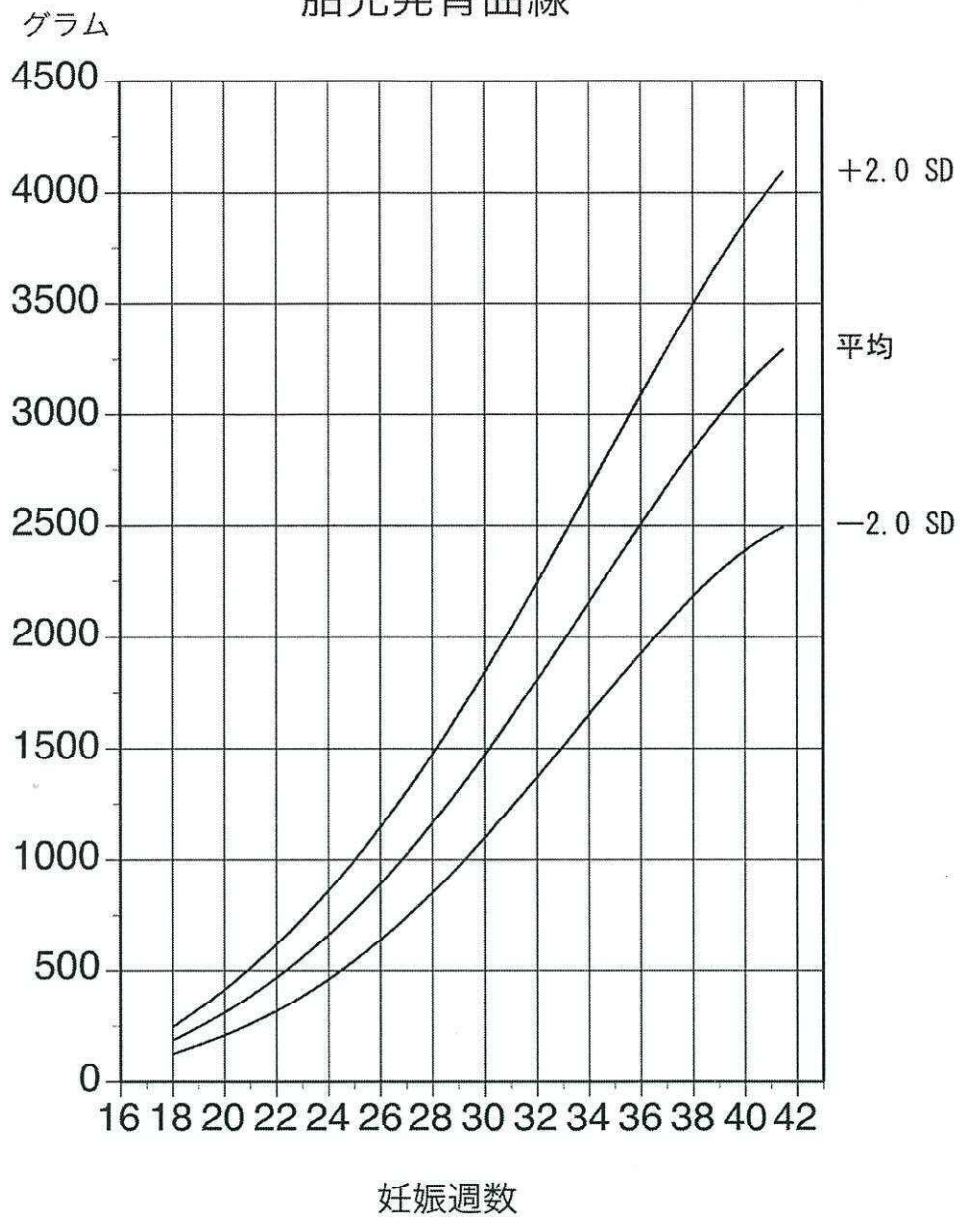
## 生まれたときの体重による分類

超低出生体重児	1000g未満で生まれた赤ちゃん
極低出生体重児	1500g未満で生まれた赤ちゃん
低出生体重児	2500g未満で生まれた赤ちゃん
巨大児	4000g以上で生まれた赤ちゃん

## 成熟度による分類

未熟児	2500g以下で生まれた赤ちゃんや 早期産の赤ちゃん
成熟児	正期産・正常体重でうまれた赤ちゃん お母さんのお腹の外の環境に適応できる
過熟児	過期産児 や 巨大児

## 胎児発育曲線



妊娠週数別の胎児体重の基準値（超音波検査法による）

3つの線は+2.0 SD、平均値、-2.0 SDを順に表しています。（SD：標準偏差）

正常発育児の95.4%が±2.0 SDの範囲にはいります。

（正常児の約98%が一番下の線よりも上にはいることを表しています）

日本小児科学会新生児委員会報告

新しい在胎期間別出生時体格標準値の導入について

日本小児科学会新生児委員会

板橋家頭夫 藤村 正哲 楠田 聡 田村 正徳  
林 時仲 高橋 勉 五石 圭司 二村 真秀  
高橋 幸博 磯部 健一 飯田 浩一 上谷 良行  
近藤 裕一 白幡 聡 杉浦 正俊 高橋 尚人  
船戸 正久 堀内 勁 山口 清次

要 旨

厚生労働科学研究班によって2010年3月に新しく「在胎期間別出生時体格標準値」が作成された。本標準値は、現在使用されている在胎期間別出生時体格基準値に取って代わる存在である。日本小児科学会新生児委員会は、新しく作成された「在胎期間別出生時体格標準値」を2011年1月1日以後に出生した児から適応することを提案する。

はじめに

在胎期間別出生時体格基準値は、新生児のリスク予知や早産児の出生後の成長の指標として、さらには国や地域における経年的変化や諸外国との比較の指標として広く利用されている。現在、わが国で使用されている基準値<sup>1)</sup>は、1995年に出生した新生児のデータをもとに作成されたものであり、最近の周産期医療や母体・胎児環境を反映していないこと、作成対象症例数が1,133名と少ない(とくに在胎24週以下)ことなどの問題があり、updateされる必要がある。

そこで、2008~2010年にかけて、厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究)「周産期母子医療センターネットワークによる医療の質の評価とフォローアップ・介入による改善・向上に関する研究(主任研究者:大阪府立母子保健総合医療センター 藤村正哲)」班の分担研究として「日本人在胎期間別出生時体格基準値の作成に関する研究(研究分担者 板橋家頭夫)」が行われ、後述する作成のプロセスを経て、基準値ではなく、新しく「在胎期間別出生時体格標準値」が作成された<sup>2)</sup>。

1. 作成までのプロセス

日本産科婦人科学会周産期登録委員会の協力を得て、同委員会登録データベース(2003~2005年, 147施設)から得られた150,471名の情報のうち、多胎児や死産児、胎児水腫、重篤な先天奇形、在胎期間や性別が不明な児、在胎42週以後で出生した児、出生時の計測値が明らかな外れ値である例を除く143,370名(表1)を対象に、在胎期間別出生体重および身長に関する基準値の作成を試みた(頭囲はデータベースになかったため、その後再調査した)。その結果、この対象によ

り作成された在胎期間別出生体重基準値は、現在使用されている基準値に比べて男女ともに早産において10パーセントイル(10<sup>th</sup>P)値が下方にシフトしており、最大で約400g程度少ないことが示された(図1)。対象の娩出方法をみると、図2に示したように早産児は極めて高率に帝王切開で出生していることが明らかとなった。そこで、帝王切開で分娩となった児38,622名と経陰分娩で出生した児104,748名に分けて、それぞれ在胎期間別出生体重のパーセントイル曲線を作成してみると、特に帝王切開率の高い早産において両者に大きな相違があった(図3)。このことから、早産児の出生体重分布の10<sup>th</sup>Pを下方にシフトさせている主な要因は、帝王切開で娩出された早産児の存在であると考えられた。

経陰分娩と帝王切開による分娩で出生した143,370名で作成された在胎期間別出生体重基準値は最近の周産期医療を反映した結果であるが、これまでの基準値<sup>1)</sup>に比べて10<sup>th</sup>Pが最大400gも低下することになり、出生した児のリスク予知や早産児の出生後の成長の指標としての利用にも混乱が生じる可能性が予測される。このような理由により、今回は、経陰分娩で出生した104,748名を対象として基準値ではなく標準値として作成する方針とした。

一般在胎期間別出生時体格基準値は、特定の民族を対象に、多胎児や死産児、高度の先天異常を除いた対象で作成される。一方、在胎期間別出生時体格標準値は、子宮内発育に影響する諸因子を除いた出生時の身体計測値によって作成される。理論上は理想的な在胎別の出生時の体格値であるとされるが、早産児についてはその保証はない<sup>3)</sup>。したがって、在胎期間別出生体重分布に強く影響する帝王切開例を除いた対象で作